

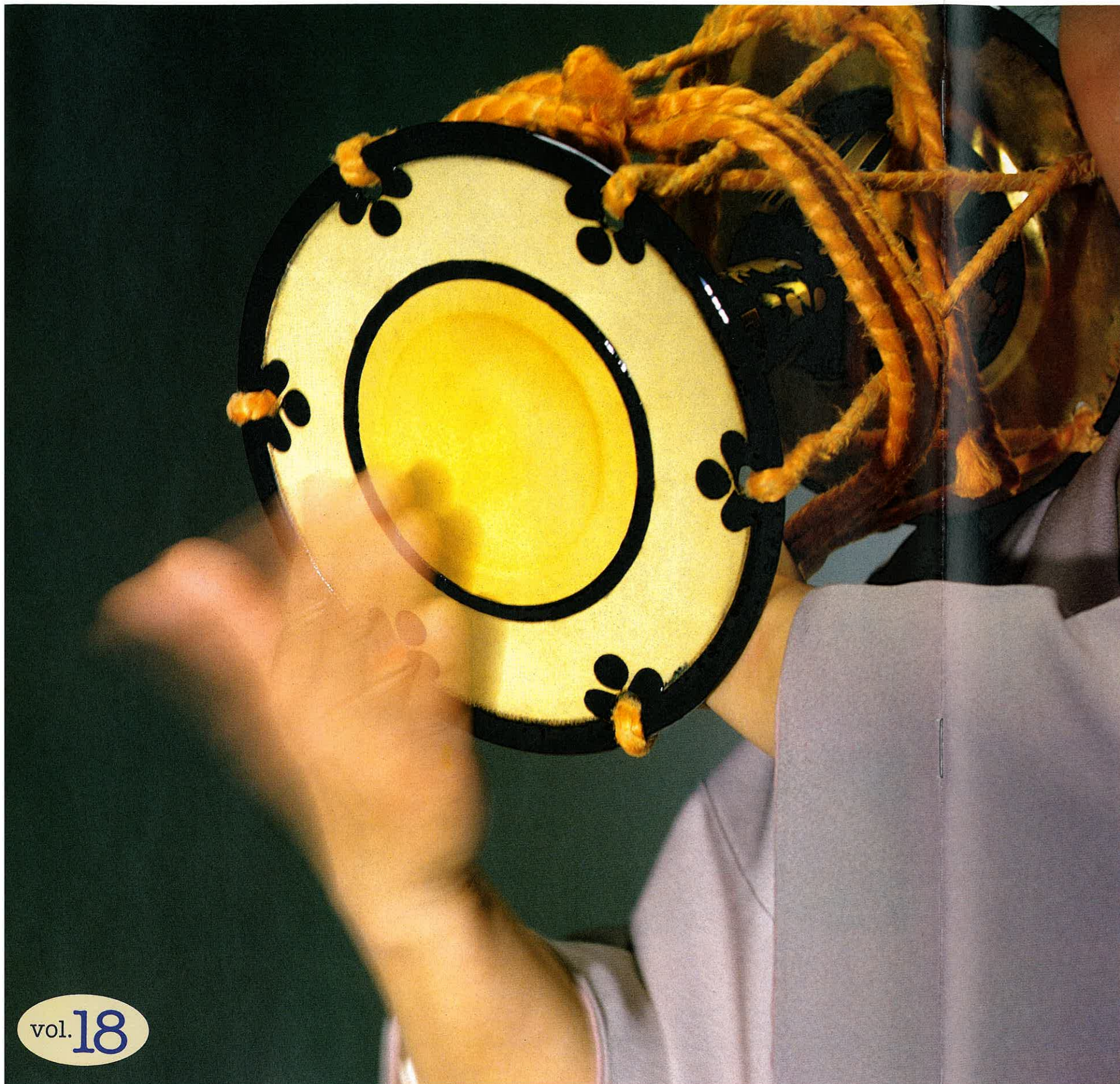
文化・交流—新しい地域創造

# ロゼ

文化情報誌 ロゼ

Art information of Fuji city **Vol.18**  
Culture Magazine ROSE **WINTER 1997**

冬号



vol. 18

# ロゼ

富士市文化情報誌 ロゼ 1997年1月発行 (第18号)  
発行 (財)富士市文化振興財団 〒416 富士市夢原1307番地の8 TEL.(0545) 60-2510(代)  
企画・編集・制作 (財)富士市文化振興財団事業課広報係 アドスペース エービック株式会社 アタゴオル

「響きの良さが独特な  
ロゼシアターで  
チャイコフスキーの魂を  
お聞かせしたい」



世界が注目、コバケンのチャイコフスキー!!  
**ロゼで会いましょう。**  
小林研一郎

「富士市にソルフェージュの指導に行っていた事があります。もう二十年前の事です。富士市を訪ねるたびに、あの素晴らしい雰囲気、今でもそこはかとなく漂ってきます」。

時が経ち、文化・産業・経済にわたる富士市もさまざなりした一九九七年、小林研一郎は初めて私たちの前に登場する。

「以前、大ホールを見せていただきましたが響きの良さが、独特だと思います。実際にどの様に響くか、指揮するのが楽しみです」。

小林研一郎は自分で本当に自信のある曲しか指揮しようと思わない。自分の信念が伴った曲だけが、聴衆との接点に存在すると信じているからである。

「チャイコフスキー交響曲第五番」は彼が最も得意とする曲であり、必ず聴衆を堪能させてくれるはずだ。

彼はこう語っている。

「行間の宇宙。五線の陰の感性を問われる世界。チャイコフスキーから発せられた音たちの輝き。昇華された世界。祈り。エクスタシー。作曲家の魂に触れ、異次元での燃焼した叫びに変容させたい。独特



一振入魂のリハーサル

昨年12月、神奈川県保土ヶ谷市にある「かながわアートホール」に小林研一郎さんをお訪ねしました。その日、小林さんは神奈川フィルとのリハーサル中でした。前日、ヨーロッパ公演から帰国されたばかりというのに、その指揮の迫力の凄さは思わず息をのむほど。お疲れのなかインタビューには笑顔で受けてくださり、小林さんの心の広さを感じました。

'97 新春クラシックコンサート 新日本フィルハーモニー交響楽団

1月29日(水)大ホール  
開場18:15開演19:00  
●指揮/小林研一郎 ●ピアノ/園田高弘  
●管弦楽/新日本フィルハーモニー交響楽団  
●プログラム/スメタナ:交響詩「モルダウ」  
グリーグ:ピアノ協奏曲イ短調op.16  
チャイコフスキー:交響曲第5番ホ短調作品64



世界の鼓動、乱舞をお聞かせしたい」。

小林研一郎は、昨年、名門チェコ・フィルハーモニー管弦楽団の客演常任指揮者に就任した。このコンピで今年五月には「ブラハの春」音楽祭でマラーの「復活」を、その後ザルツブルグを含めたオーストリア演奏旅行で、チェコ人の最も愛する「我が祖国」を振る。チェコの国民にとって心の拠り所ともいえる名曲を、オーケストラのリクエストで振るといふ、日本人にとって音楽史を飾るビックニュースだ。

「指名されたのは大変喜ばしいこと。反面あまりにも責任の重い立場で、逃避したい事も事実です。日本人がヨーロッパやアメリカで指揮するのは本当に難しい。文化・歴史のまったく違う人達の中に入っていくのだから。『ヨーロッパで学ばせてもらって幸せ』という気持ちでオーケストラと接しています」。

常にその土地(国)での、その時の演奏を大切にしている小林研一郎。

「自分に与えられた限りある時をまばゆく生き、ほんの少しでも音楽文化の発展に役立てたら...」。

そんな謙虚な姿勢に、ヨーロッパが認めた「コバケン」。今、各国のクラシックファンから熱い視線が注がれている。ロゼシアターの公演は聴衆の期待にたがわぬ白熱したものである。(敬称略)

※ソルフェージュ  
音楽の基礎教育全般。音程、リズム、音部記号の読譜、視唱練習、和音感の養成、暗譜聴音などをさします。



Profile  
**指揮者：小林研一郎**  
Kenichiro Kobayashi

東京芸術大学作曲科・指揮科を卒業。  
1974年第1回ブダペスト国際指揮コンクール第1位・特別賞受賞。  
以来、ヨーロッパの主要オーケストラや日本の各オーケストラの定期演奏会を指揮。「ブラハの春」「ルツェルンフェスティバル」など多くの音楽祭に出演。アムステルダムフィル及びハンガリー国立交響楽団のヨーロッパ・日本公演、都響・東響の正指揮者、京都市響・日本フィルの常任指揮者を歴任。ハンガリー政府より、リスト記念勲章・ハンガリー文化勲章を受賞。現在、チェコ・フィルハーモニー管弦楽団客演常任指揮者。ハンガリー国立交響楽団音楽監督兼常任指揮者、その他多くの交響楽団で指揮を務める。

34th  
ASAHI  
CERAMIC  
ART  
EXHIBITION

# 第34回 朝日陶芸展

● 1月30日(木)～2月16日(日) ● 展示室 ● 9:00～19:00(16日は17:00まで) ●  
● 入場料/大人=300円・小・中・高生=100円



グランプリ/MOVEMENT '96 30.0×82.0×67.0 塚本治彦

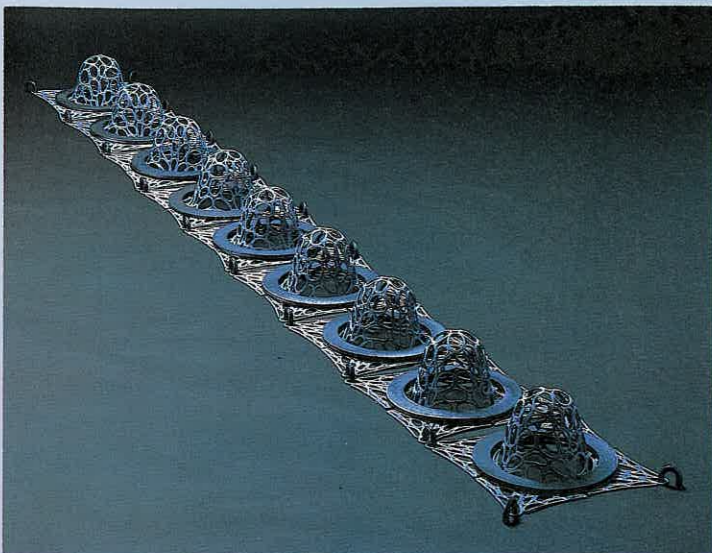
※図版表記は作品名、サイズ(高さ×幅×奥行cm)、作者名の順です。



秀作賞/青磁壺 34.5×36.0×36.0 坂井輝夫



特別賞(川崎記念賞)/東雲'96-2 24.0×59.0×59.0 長町天道



奨励賞/シャボン 30.0×35.0×315.0 今井美奈



入選/水→土・人←火 9.5×123.5×66.0 季 政鏞



入選/5人の賢人 56.0×20.0×20.0 餘吾ひろこ



入選/RAIN FOREST SERIES "LATE AUTUMN" 50.0×160.0×70.0 酒井隆夫



入選/ノア方舟 32.0×77.0×15.0 嶋田敏生



入選/藍色志野壺 48.0×34.0×34.0 酒井博司

新春を飾る数々のイベントの中で異彩を放つ催し物と言えば、この「朝日陶芸展」につきま。一月三十日(木)から二月十六日(日)まで展示室の全フロアーを使って展示される全国規模の陶芸展は、まさに圧巻と言えましよう。

昨年九月から、名古屋、佐賀、滋賀、福井、三重、と陶芸の本場と言われる各所で開催されてきたこの「朝日陶芸展」、静岡県ではこの富士市のロゼシアターのみで開催です。本誌ではこの素晴らしい陶芸の世界を一人でも多くの皆様に鑑賞していただくとう審査員の一人である鈴木治先生にお話を伺いました。

まず、「朝日陶芸展」の概要から伺います。そうですね、この陶芸展は全国規模の公募展で、もっとも長い歴史をもっています。今年で三十四回となります。

当初より、古典的、伝統的な器物から、俗にオブジェと呼ばれる新しい陶造形に及ぶ陶芸界のあらゆる種類の作品を網羅し、受け入れてきている公募展です。

今年、六四五点というもっとも多い作品の応募がありました。このことは、この朝日陶芸展に出品する人たちにとって、陶芸の一つの登竜門としての認識が定着してきているあかしと言えるのではないのでしょうか。

今回の審査をされて、どのようなことをお感じになりましたか？

審査会場というところは非日常的な不思議な雰囲気をもっているところ。一堂に集められた膨大(ぼうだい)な数の作品群から伝わってくる熱気と、はりつめた緊張感、そしてそれぞれの作品のせめぎ合いが聞こえるような場です。

そのような中で審査の票数の集計をくり返しながら、作品数が徐々にしぼられ、最終一〇九点の入賞入選作が決定することになります。

かつての出品作には、もったいぶったおかげさなものと、騒がしいばかりだとか、強烈な色彩で人を驚かすだけというような、自分の思いを土に託して表現する必要があると感じさせないものがよく見られましたね。しかし、それはそれで土で何が可能かという一つの実験であった筈であり、必然

もう少し突っ込んで考えてみると、作者が自由に創作に向かうことに、積極的に「用」を意識することとは簡単に同化し得ないむずかしい課題のように思っています。

少し短絡的になってしましますが、オブジェ陶の登場はそんなような思いが一つの要因となつて、「用」を離れ壺の口を閉ざして新しい陶表現の道を拓(ひら)いていったのではないのでしょうか。ここでいま一度積極的に「創作」と「用」との関係(た)だして、陶表現に新鮮な魅力をもたらし一つの方法だと思えます。

上位入賞作品について、解説をして頂けますか。今回、大賞(グランプリ)を得た塚本治彦氏の「ムーヴメント'96」は、古典的な技法をふまえたオリベ(織部)の変形鉢と言つていいでしょう。土の持つ性質を十分に生かした作風と俗に「オリベくすり」というみどりのうわぐすり」の快調さから、緊張感のある強さを保ち、豊かな造形をみせてくれる堂々とした仕上がりです。見るものはこの作品を変形鉢と判断しがちですが、作者は鉢を思わずカタチを作りながら、鉢という器物にとらわれず、あくまでゆがんだ平板な凹んだカタチにとらえて

を見出すことのできないままの未消化の結果と言えませんか。今回は、そのような作品は姿を消していますが、それだけにおかたの印象が、ある水準で平均化しているように感じられました。

応募作品に見られる、傾向のようなものがありましたら。

先に話しました、ある水準で平均化していることを視点を変えてみると、もっとも大切なことは創造ということである筈なんです。多くの作品は、それなりにバランスよくまとめたという気分だけが先行し、独創性というものが薄らいでみえたのは少々残念な気がします。日常、何気なく使っている創作という意味をもう一度考え直してみる必要があるですね。

一方、伝統的な陶表現には器物であろうとする大切な要素があります。それと連携して「用」ということも考えなければなりません。民芸運動で「用即美」とお題目のように言われて久しいですが、もっと広い用途という、例えば壺(つぼ)に口があればみずをいれるというような普通のこと(が)大切なテーマとなります。

今回の応募作品の中には明らかに、その使うこと(が)なくなった皿や壺もありましたが、大半は用途に関係なく壺は口のあつたもの、皿は凹(へこ)んだ平板な形態のものとする既成概念をベースに制作されているように思えます。

作者自身はその概念と器物のもつ用途性を安易に結びつけて納得しているのではないのでしょうか。

いるやもしれません。先ほどの「創作」と「用」との関係をはらむ作品でもあります。

特別賞は、伝統的な作風の色濃(こ)い作品に与えられる賞ですが、今回は「東雲'96-2」と題する大鉢に決まりました。ロクロで作られた大鉢ですが、いろいろ手法が混じり合つて不思議な調和を見せています。伝統的な仕事もゆつくりと拡(ひろ)がりを示す好例(こうれい)でしょう。この二点の共通するところは、古典技法と新しい表現との接点(けつてん)であるように思えます。この接点(けつてん)がこれからの陶表現に、また一つ大きな展開をはらむ風を起(おこ)すような気配を感じさせてくれます。

どうもありがとうございました。一月三十日からの陶芸展には大勢のお客様が訪れて下さることと思います。



審査会場の鈴木先生

## 「朝日陶芸展」のあゆみ

「朝日陶芸展」は、昭和38年に創設された現代陶芸の公募展です。創設当時は「新進陶芸家の登竜門」でしたが、現在では大学等に在学中の若い陶芸家の方々から20年以上の陶歴を持つベテランの方々まで、幅広いキャリアの作家が応募をしています。また最近では、「陶芸」という、芸術性の広がり(が)に比例するように、応募者も陶芸家ばかりでなく彫刻、建築、絵画など幅広いジャンルにわたるようになりました。

'96年度は全国41都道府県から過去最多の645点が応募されており、この陶芸展が既成の作家団体にとらわれない点で、意欲ある作家の皆さんに高く評価された結果と思われま。

また全国8会場で開催される作品展は、現代陶芸界の動向を伝える展覧会として毎年、各方面から注目を浴びています。

## 鈴木 治 Osamu Suzuki PROFILE

- 1926年 京都市生まれ
- 1948年 走泥社結成
- 1962年 プラハ・第3回国際陶芸展金賞受賞
- 1984年 第1回藤原啓記念賞受賞
- 1985年 毎日芸術賞、陶磁協会金賞、日本陶芸展賞など
- 1994年 紫綬褒章 現在京都市立芸術大学名誉教授

- 個展 鈴木治陶磁展(日本経済新聞社主催)、鈴木治展(京都府主催)など
- 主な著書 「鈴木治陶磁作品集」(講談社) 「現代の陶芸」(講談社) 「日本の陶磁」(中央公論社) など

ウィーン少年合唱団のさわやかな歌声で始まった平成8年度のイベントの数々。4月から10月までの自主公演のあの感動を、それぞれの催し物に寄せられたアンケートをもとにフラッシュバックしてみました。

(富士青少年国際音楽祭は前号で紹介したため割愛しました。) ※サインは出演アーティストからいただいたものです。

### 展示

#### ●「静岡の美」展 5月1日(水) ～12日(日)



●静岡県の素晴らしさを再発見できた企画に感謝します。(富士32歳女性)  
●作者がどんなに郷土を愛しているのかわかった。(富士52歳女性)



#### ●楽器の浪漫シリーズ 「フルートの浪漫」 6月8日(土)～16日(日)

●フルートを間近に見て、楽器そのものも芸術的で美しいと思いました。(富士53歳女性)  
●実際に手を触れることができたり、吹いたりできてわかりやすいなあと思いました。(富士33歳女性)

#### ●ふじの芸術家たち 「小島万里子・石倉妙子展」 9月14(土)～23日(月)

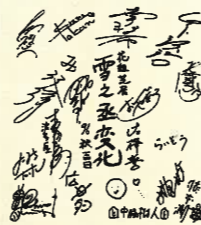


●富士出身の方にも素晴らしい方がいるのだと驚きました。(富士30歳女性)  
●感性の貴さにただただ驚くばかり。(富士54歳女性)



#### ●花組芝居「雪之丞変化」 9月20日(金)

●奇想天外のパロディーでした。(富士56歳男性)  
●乱舞の時のジャズが気持ちいい。楽しくて涙がでた。(静岡39歳男性)



#### ●カルミナ・クアルテット 10月11日(金)

●一人一人のデリケートな心のひだから生まれるアンサンブル。時に優しく、激しく、人間の感情の素晴らしさを伝えてくれた一晩でした。(浜松30歳男性)



#### ●プラハ国立歌劇場 「魔笛」 10月26日(土)

●夢の中にあるような2時間半でした。(富士45歳男性)  
●地方でこれだけの舞台を見ることができて大感激です。(田方郡28歳女性)  
●「オペラへの誘い」を思い出し、ロゼの計画的な演出がとても良かったと思った。(富士24歳女性)



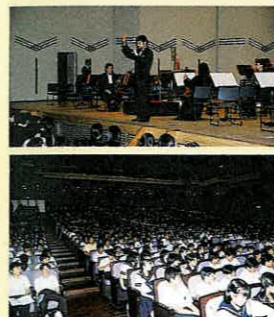
#### ●プラハ放送交響楽団 6月14日(金)



●弦の厚みと管楽器の華やかさが相まって、久しぶりに良い演奏を聴きました。(静岡64歳男性)  
●なんだか文通していた友達に初めて会ったかのような不思議な感激があります。(富士26歳女性)  
●息子からの誕生日プレゼントとして、良い思い出になりました。(富士宮56歳女性)

#### ●ふじ少年少女芸術劇場

小学生招待コンサート 7月4日(木)  
中学生招待コンサート 7月8日(月)  
小学校学校コンサート 10月21日(月)～24日(木)



●未来を担う小学生・中学生を招待して行なうロゼ・オリジナルコンサートを今年も開催。新日本フィルハーモニー交響楽団と静岡交響楽団の迫力ある音に生徒たちは目を大きく開き、聴き入っていました。

#### ●ミルバ・ドラマティックリサイタル 7月6日(土)

●イタリア語は何を言っているのかわからないが、声のトーンだけで胸に響くものがあつた。(富士64歳女性)  
●迫力ある世界的な歌手の歌を目の当たりにしてただただ感激・絶賛の拍手。(富士72歳男性)  
●イタリアの風を感じました。(庵原郡32歳男性)



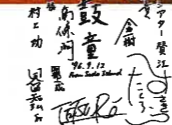
#### ●アメリカンバレエシアター 「白鳥の湖」 7月16日(火)



●オアットの全身全霊で舞う仕草が白鳥の美しさを余すところなく表現し、とても感動した。(富士54歳女性)  
●群舞の白鳥の配置や踊りの構成が独創的で新しいと思った。(富士宮34歳女性)

#### ●鼓童 9月12日(木)

●毛穴の一つ一つから音が染みこみ、懐かしさや、いとやさでいっぱいになりました。(富士38歳女性)  
●筋肉の動き、飛び散る汗が素晴らしいと思います。(富士43歳女性)



#### ●ウィーン少年合唱団 4月2日(火)

●皆さん、フランス人形みたいにきれいでびっくり!(富士40歳女性)  
●子供の頃からあこがれだった天使の歌声を目の前で聴くことができ大変幸せでした。(富士宮40歳女性)  
●鳥肌が立つような透き通った声なのに、体が暖かくなる歌声。(富士30歳女性)



#### ●ザ・ロッキーホラーショー 4月12日(金)

●ローリーさん、初めて本物見ただけとセクシー・ラブリー・ステキ〜って感じです!(沼津22歳女性)  
●もう、ごきげんな舞台としか言いようがない!(賀茂郡24歳女性)



#### ●'96 MAYコンサート 5月26日(日)

●新人の音楽家さんの緊張した表情と素晴らしい演奏に感激いたしました。未来に向けて最大の拍手を送ります。(富士60歳女性)  
●長い間の道のりが美しく花咲いた、感無量でした。(富士71歳女性)



#### ●ロゼイヴニングコンサート・第1夜 「音楽の都をたずねて～イタリア」 5月30日(木) ミハイル・ワイマン(Vn) ディーナ・ヨッフエ(P)

●ヨッフエさんの衣装は大人の女性の落ち着きを感じられてGOOD!(富士24歳女性)  
●素敵な演奏に加え、お二人の睦まじさが伝わり大変満足しました。(富士宮58歳男性)



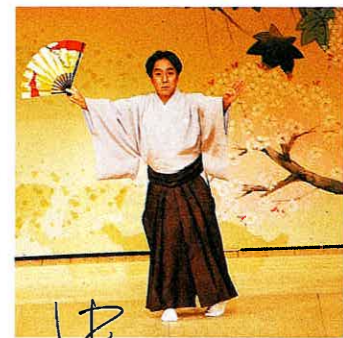
#### ●ロゼイヴニングコンサート・第2夜 「音楽の都をたずねて～フランス」 8月2日(金) 上田晴子(P)

●ピアノの音色が暑い夏に涼しく響くようで、何かホッとしました。(富士30歳女性)  
●上田晴子さん、とても素敵でした。知的で優しく才能があふれ、すっかりファンになってしまいました。(庵原郡40歳女性)



#### ●中村勘九郎親子競演会 6月1日(土)

●初めて生で歌舞伎を見て、まるで江戸時代にタイムスリップしたような感動を覚えました。(富士26歳女性)  
●一流の役者の芸に打ち込む役者魂を感じました。(庵原郡65歳女性)



### 市民合唱の夕べ

### 「見よ西風からの富士」

●11月1日(金)

「RETICULATION」(作曲:大村久美子)

指揮:堤 俊作  
ピアノ:佐々木 麗  
演奏:静岡交響楽団



昨年1月から10月まで、月2回のペースで練習に励んできた合唱団の皆さん、この日、いよいよ本番を迎えました。白と黒のコスチュームがコンサートホールにピタリとマッチしてコーラスが心地よく響き、静岡交響楽団と見事なハーモニーを奏で始めた。佐々木麗さんのピアノから華麗なメロディーが流れ、堤さんの棒が生き物のように動き、クライマックスを迎え、やがてフィナーレ。富士山の鳴動は静まり、感動のマグマはそれぞれの胸の中へ深く深く沈んでいった...

新市施行30周年とロゼ開館3周年記念のこの日、170人を超える出演者がステージで心をつなぐ郷土を歌い上げたのです。

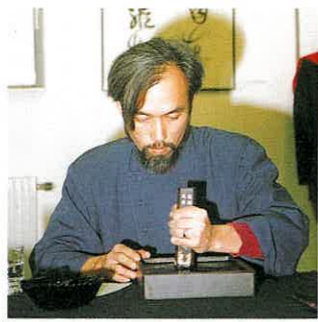




鄭進發氏の書「一如」

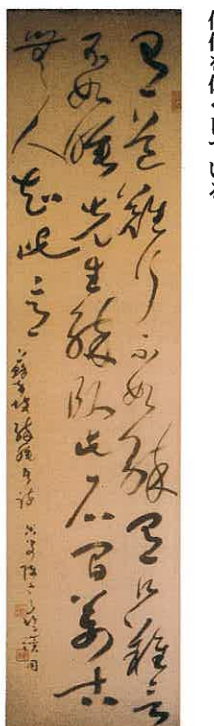
**書道界の移り変わり**  
台湾書道の歴史は一七世紀半ばに遡る。明代末の文人的書風に源を発し、行草体が主流であった。その後の変遷の中で雄渾な筆勢を特色とする林朝英、鄭鴻猷等の名家が出る。一九世紀半ば、福建省の在野文人により清朝金石学の伝統が導入される。魏碑の書風は日本の媒介で二十世紀初頭に広まる。日本統治下(一八九五—一九四五)、書道は小中学校の正式科目となる。台湾の伝統的書画形式の排除に伴い、それまでの科挙や功名の為の書道訓練という考え方も変わる。書家達は不撓不屈の精神で全国的書画展を主催したり、書道展に参加し成果を収める。基隆書道会、麗沢会、鴉社が最も有名な書道団体である。書家は曹秋圃が名高い。戦後、国民党政権により保守的書風が導入され楷書、隸書、篆書などの理的書体が重視

される一方、書道は心性を教養する単なる余技となる。  
**今日の書道事情**  
現在義務教育に書道はなく、正しい標準文字を書く訓練を目的とした「写字」があるだけで書道芸術とは無縁だ。書道人口は子供や老人に集中、学習の動機も冷静になる効果や教養を誇示することを目的とし、書く内容は詩詞一類や蒋介石親子の「人倫を助け教化を成す」といった説教調の名言が大半だ。現代化に進まず、「書道報国」のように右翼に利用される。この中で、「標準草書」を提唱した于右任は造詣において芸術性レベルに至った。  
書芸術家の代表は陳丁奇、陳雲程である。陳丁奇は辻本史郎の影響を受けたことから日本趣味と誤解され



鄭進發氏(1948~)

台湾の書道  
—— 同国書道界の異端児  
チエン・チン・ファ  
**鄭進發氏に聞く(協力: 陳彦碩氏)**  
内藤 間喜



陳雲程(1906~)の書

ているが、後に独自の書風を確立した。張力が膨れた中に奔放な躍動感に溢れ、線質は氷肌玉骨のような高潔さがある。陳雲程の書風は自然で率意の特質があり線の筆勢は雄健で字形は柔らかい軽妙さを伴った流動美がある。日本で日下部鳴鶴に魏碑を学ぶ。藤原かな草書、標準草書、二王の今草書体を融合し独自の書風を樹立した草書の達人である。  
台湾の書家は雄渾にして磅礴な書風、優美で流暢な線質を特徴とし、日本人に見られる剛猛な筆致や渋味は稀である。若手には裝飾的書表現や明代末の連綿草に取り組み、新しい道を切り開こうとする者もいる一方、主流書家の大半は保守的儒教思想をもつもの、古典の教養も深くなく現代芸術との接点も少なく単に先生の風格を固守しているだけである。また大衆の多くは、ただ同然で書家に作品を求める傾向がある。このような事情が書家の地位と作品の価値を低くしている。



陳丁奇(1911~1994)の書

鄭氏のパフォーマンスとしての書芸術感

書、特に草書芸術は自然を模倣する文字から離れた線により、作者の心に潜む最も奥深いものを直接かつ無想的に反映するところにあり、「直指本心」の最良手段である。「藝而進於道」の如く、書芸術は自ら芸術の「美的範疇」を超越、個人の極限を突破することで書家自体も媒体の一部となりうる。従って書写の全過程は全体を使う一種の芸術表現(行動芸術)である。書芸術の本質に達するには結構、章法、技法の設定を放棄し、書を一切の束縛から解放、自然のままに表現させることだ。この時、書は無「法」となり、真の「書法」を表現できる。

鄭進發(チエン・チン・ファ) 略歴

1948年台湾高雄市生まれ。国立台湾大学歴史学科及び同大学院卒。中国芸術史修士。書を楊宗道、莊嚴に師事。ハイデルベルク大学にて芸術史研究。台湾、ドイツ、アメリカ、イタリアで個展を多く開く。現在、台北興文化センター在職。国立台北師範学院美術教育学科書道科講師。著書3冊。

マンドリン製作・演奏家  
**内藤 間喜**

Yasuyoshi Naitoh ● PROFILE

富士市出身、現在ドイツ・ケルン市在住  
海外のさまざまな文化情報を新しい切り口で取材し、レポートを送っていただいています。

肉声は最高の楽器  
だから人の心を一番  
強く打つのです

藤原歌劇団にあって、近年進境著しい活躍を見せるバリトン歌手の長谷川寛さん。昨年は二度もロゼの舞台上で登場し、私たちを魅了しました。今回は長谷川さんに、歌手の視点からオペラを持つ魅力や将来への可能性について語っていただきました。

■まず、オペラ歌手になられたきっかけから……  
とにかく歌が好きで、高校時代から音楽部で合唱の指揮などしていました。友人たちは当然のように私の進路は音大だと信じていましたし、私も将来例えば音楽教師などの職を得て音楽とかかわりながら生きていきたいと考えていましたね。歌手の道を選んだ直接のきっかけは音大の三年生の秋でした。ある放課後、練習室から朗々とした歌声が聴こえてきました。その瞬間私の中を電流が走り、同時に自分の非力さに愕然としました。その声の主は音大卒の歌手の方でしたが、そのときからですね、自分のあやふやさを捨て歌手として生きていこうと決心したのは、イタリアに留学されていますが彼の国におけるオペラとは……



藤原歌劇団「トスカ」よりスカルピア(東京文化会館)

イタリアでは生活の中にオペラがあるというのが私の感想で、イタリア語自体が音楽的な響きを持っている。また音楽院では「歌うように喋れ、喋るように歌え」と教えます。ところで、歌手は楽器と同じで全体を共鳴させるために内部の空間を拡げようとしています。これを「体を開ける」と言いますが、イタリア語の発音には自然とこの動作が要求されます。ですから街で耳にする八百屋の親父さんや電車の車掌さんの声のよく通ること、『いい声だなあ』と聴きほれたものです。また音楽院ではオペラの演技の研鑽も積みましました。これは帰国後の実感ですが、イタリア語で生活していたときのほうがナチュラルで即興性に富んだ演技ができるんですね。まさに暮らしの中にオペラありですね。

■ご自分のパートであるバリトンの特性や魅力は？  
私の声質は、バリトンの中でも低く重い方ですので、軽快さを要求されるフィガロよりはジェルモン(椿姫)やヤーゴ(オテロ)、スカルピア(トスカ)などに向いています。バリトンは個性的な敵役が多く、物語の進行や輪郭を明確にする役どころで、年齢設定も丁度私の年回りと一致します。そんなこともあってか、ここ数年来自分なりに充実感をもって役づくりができます。また息の長いパートですので、今後も様々な役に挑戦していきたいと思いますが、いま最も演じてみたいのがブッチー二作曲「外套」のミケレ。若い妻を持った中年男性の苦悩を切々と歌い上げてみたいですね。

■オペラを演じての楽しみは？  
現実には、毎日が清水の舞台に立っているようなものです。オペラは総合芸術と言われるように歌だけでなく様々なことを要求されます。声の調子はどうか、歌詞を忘れないか、オケやアンサンブルとの呼吸はどうか、イメージ通りの演技ができるかなど日々役づくりの中にあり、そのストレスの蓄積たるや相当なもの。オペラ歌手を生業にした自分を呪うのみです。でも、幕が降りカーテン

■オペラを演じての楽しみは？  
現実には、毎日が清水の舞台に立っているようなものです。オペラは総合芸術と言われるように歌だけでなく様々なことを要求されます。声の調子はどうか、歌詞を忘れないか、オケやアンサンブルとの呼吸はどうか、イメージ通りの演技ができるかなど日々役づくりの中にあり、そのストレスの蓄積たるや相当なもの。オペラ歌手を生業にした自分を呪うのみです。でも、幕が降りカーテン

コールを受け、大勢の舞台スタッフから拍手で迎えられると、皆でやり遂げた充足感を心から味わえる至福のひとつが訪れます。  
■最後に地方都市におけるオペラの普及についてお聞かせ下さい。  
先ず認識すべきは、肉声は最高の楽器であり人の心を一番強く打つということ。これにオケが加わり物語が展開するわけですから、見ていてこんな楽しいものはありません。昨年、「椿姫」がロゼで富士市民の手で上演されましたが、これは大いに評価すべきだと思います。合唱で参加した皆さんも、練習で個々の役づくりにより一生懸命でしたし、時間とお隣の富士宮市でも「カヴァレリア・ルスティカーナ」が市民参加で上演されました。こんな私の経験から言える一つの方向性は、先ず市民がオペラを演じてみるということ。身近で愛される演目を選んでね。そこにオペラの未来が見えてきそうです。でもストレスを溜めてはいけません、それは私たちに任せて大いに楽しんで欲しい。何故なら、オペラはこの世で最高の娯楽で最高の贅沢なので



声楽家 **長谷川 寛** Kan Hasegawa ● PROFILE

富士宮市出身。富士高等学校、武蔵野音楽大学卒業。第16回日本伊声楽コンクール第1位。第49回日本音楽コンクール入選。イタリア政府給費留学生として渡伊、ローマ・サンタチェチーリア音楽院修了。第15回ベッリーニ国際声楽コンクール第2位。在伊中、パドヴァ、ローマなどイタリア各地でオペラやコンサートに出演。帰国後、第33回文化放送音楽賞受賞。第5回ニッカ・カルメンシータコンクール第1位。「リゴレット」「椿姫」「蝶々夫人」等多くのオペラや「第九」、メサイア等のソリストとして活躍。昨年2月藤原歌劇団公演「トスカ」のスカルピアを演じ好評を博す。今年1月同公演「椿姫」のジェルモンで出演予定。また、昨年6月富士宮市で「カヴァレリア・ルスティカーナ」、8月ロゼにて佐野糸代琴氏とジョイントリサイタル、9月同所で「椿姫」に出演等、郷土でも積極的に活動。現在、武蔵野音楽大学講師、昭和音楽大学講師、藤原歌劇団団員、神奈川県模範原市在住。

Table with columns: 日, 曜日, ホール, イベント. Contains event schedule for February 1997.

展示室のご案内

Table with columns: 展示期間, 展示室, 催事. Lists art exhibitions.

今年明けましておめでとございませう。今号の巻頭はコバケンさん「世界の大指揮者をつかまえて」に引き続き、お話しを伺いました。お話しを伺いました。お話しを伺いました。

チケットのお申し込み・お問い合わせは ロゼ・チケットセンター ☎0545-60-2500 受付時間 9:00~19:00

Table with columns: 日, 曜日, ホール, イベント. Contains event schedule for March 1997.

はロゼシアター主催事業 ★印は、ロゼ・チケットセンター窓口でもチケットを取扱う予定のものです。

雨にも負けず西風にも負けず 昨年、一月より練習を開始した「市民合唱の夕べ」は、思えば雨の日も雪の日もあつた。そして台風直撃の日。練習を中止するべく、合唱団員一人一人に電話をかけた。が、遅かった。暴風雨の中、ロゼに到着したMさんに大目玉を食らいました。

プレイガイド ■ラ・ホール富士 ☎(0545)53-4300 ■ユニサービスカウンター ☎(0545)51-9027(代)

Table with columns: 日, 曜日, ホール, イベント. Contains event schedule for April 1997.

▼イベント見どころガイド▼

～ロゼ・レクチャーシリーズ～ 能への誘い



観世流シテ方津村龍次郎師が、実演を交えたやさしいレクチャーで能の神秘と幽玄の世界へ誘う3回シリーズ。初心者にもわかりやすい解説付きのお勧め公演です!

私の記憶(柳屋展から) 一・五トンを超える芸術作品を搬入するのは初めての経験。ユニック車一台に四トントラック四台と、知らない人は一体何が出来るのかと聞いた。大の男が五・六人掛かりで「せーのー」と声を合わせる。いくら重たいといつても気になり始めると一センチずつ動かし、やうやうでも、作品を見上げる作者のきらきらと輝く瞳をみると、なんだかうれい気持ちになった。

ユニサービスカウンター ☎(0545)51-9027(代) ■カワセ書店 ☎(0545)71-9592 ■カワセ書店 ☎(0544)24-7160

Attention!



1997・4・17(Thu.) 宝塚歌劇花組公演決定!!

ロゼの来年度事業の速報で～す!! お待たせしました。いよいよ宝塚歌劇がロゼシアターにやってきます。華やかで夢いっぱいのステージをお見逃しなく!!

NHKのど自慢 IN ロゼシアター



日曜日のお昼といえば「のど自慢」。富士市新市施行30周年記念事業の一つとして、NHKのど自慢公開生放送が大ホールで行なわれます。

INTERMISSION ～「魔笛」公演から～

富士市丸の鈴木志保さん(写真右は静岡のお友達、宮坂文子さんと一緒に来館されました。鈴木さんは静岡大教育学部の音楽科で勉強しています。「地元で本格的オペラを聴けるのは絶好のチャンス、この日を楽しましにしたい」と仲の良いお友達同士でした。

オペラ「魔笛」に出演したチビッコバレリーナたち



この時、大ホールのステージに、九名のかわいいバレリーナが出演したのをお客様方はご記憶のことと思います。実はこの日、地元、伊藤美智子バレエ団に所属する小学校一年生のチビッコバレリーナたちがプロに混じってオペラの舞台に出演したのです。役どころは、パミーノとパミーナのかわいい子どもたち。

1997 2・2(Sun.)



出番が近づき、衣裳に着替えるともうすっかりその気。緊張しているどころか舞台上に上がるのを楽しんでいられるといった様子。出演者と笑顔で話したり、楽屋で友達とおしゃべりしたり...大したものです。

公演の休憩時間、お話しを伺いました。

沼津市東横路からお越しの伏見さんご夫妻。お二人で木管楽器を演奏し、現在沼津交響楽団のメンバーのこと。聡子さんはオーボエの奏者で現在、芸大に通う専攻生です。「きれいな音楽を気持ちよく聴きたいですね」とコンサートに出かける服を選ぶのも楽しみのひとつだそうです。

トキメキ WAKU WAKU 通り

十月二十六日(土)、プラハ国立歌劇場によって、ロゼシアター初のオペラ公演「魔笛」が上演されました。この時、大ホールのステージに、九名のかわいいバレリーナが出演したのをお客様方はご記憶のことと思います。



お疲れさまでした。お話しを伺いました。お話しを伺いました。お話しを伺いました。